

すべては計算できている

目次

プロローグ 四時十七分 5

第1章 凡例 25

第2章 バロロロ 69

第3章 匏 105

第4章 灰釉 177

第5章 陶土 233

第6章 湯呑み 279

補章 引き継ぎログ——深層アーカイヴ，消去前 303

終章 雪 311

あとがき 401

装画…落合陽一
カバーデザイン…鈴木成一デザイン室
本文デザイン…石澤義裕

プ
ロ
ロ
ー
グ

四
時
十
七
分

質量のない鯨の声だ。

海のない部屋で、それは喉だけを借りたように鳴り、四時十七分の暗がりを一度だけ内側から膨らませた。僕は枕元の録音を押した。直後、壁の向こうで隣室の男が「うるさい」と言った。誰に言ったのかは、わからない。僕は黙っていたし、部屋も鳴っていないかった。十秒ほど待って録音を止め、再生すると、冷蔵庫の唸りと男の「うるさい」だけが正しい振幅で並び、鯨のいた場所には平らな帯があった。機械は何も録り損ねていない。鳴らなかった部屋を、鳴らなかったとおりに録っていた。ファイルには自動で〈会議〉と名がついた。削除しようとして、残した。

四月の末、桜はとうに散っていた。

濡れた花卉がホームの端に貼りついてた。茶色い一枚を革靴が踏み、靴底へついたまま三歩運んだ。スマートフォンにはLINEの未読が二十七件あり、三件目で佐々木部長の名が出たところへ電車の到着音が重なった。画面をポケットへ入れても、布越しの震えだけが続いた。人が出終わるのを待った僕は、後ろの鞆に押されて右足だけ先に乗り、警告音の前に左足を

引き寄せた。女の「奥、詰めてもらえますか」を自分宛てだと思つて半歩入ると、新聞を読む男に「そっちじゃない」と肘で戻され、声の相手だった学生が空いた吊り革を取った。次の駅では別の男に「邪魔」と言われ、すみませんを二人の間へ置いた。どちらも返事をしなかった。靴から四つ折りの報告書を出すと、折り目の上でグラフの青い線が半文字ずれていた。山を谷へ折り返すと、裏へ回った線は一度だけ繋がり、開けばまた離れた。三日前の部長の声も、思い出すたび順番が入れ替わった。録音装置はどこにもないのに、再生だけがあった。

数えてしまう。レールの継ぎ目を、部長が視線を外すまでを、既読がつくまでを。足す。引く。掛ける。二度来たものはXORに入れて消す。そうして数に直しているあいだ、こわいものには幅ができ、幅のあるものには終わりがあつた。今朝の声だけは、どこから数えればいいのかわからなかった。

志野から「今日の夜ごはんどうする?」と、いつものクマが一匹届いた。〈外で食べてくるかも。遅くなりそう〉と返し、夕食の予約を二人分から一人分へ直すと既読がついた。返信欄へ「ごめん」と打ったところで、佐々木部長から「三輪、会議室へ来い」と届き、僕は送信しないまま端末を伏せた。

屋前の会議で、佐々木部長は遅れている工程を訊いた。投影された表には「高橋」とあつた。原因を知っていた僕が説明を終えると、部長は手元のノートPCを引き寄せ、担当欄の「高橋」を「三輪」に打ち替えた。